

和声学事始

メーソンの和声学教育に関する新資料紹介（その三）

藤原 義久

はじめに

本誌第七号⁽¹⁾・第八号⁽²⁾に発表した中村専の和声学ノートに関するレポートを、今回も続けたいと思う。

第七号では、ノートが書かれるにいたった歴史的背景、次にノートの存在そのものが提起する日本近代音楽史上の問題点、およびノート発見の経緯について考察した。ついで第八号……前回は、専のノートのページを一枚一枚くりながら、その音楽的内容の検討にうつり、必要以上の想像を抑制しつつも、L・W・メーソンによる我が国最初の和声学講義が、どのような風景の中で行われたかをレポートしてみた。

そして全二十一回の講義の第五回まで、内容的にはヨーロッパ音楽の根幹をなす響き……属七の和音までの講義を紹介することが出来た。で、今回は、それに続く第六回以降のメーソンの講義を、中村専のノートをたよりに追ってみたいと思う。



譜例 1

第六回～第八回までの講義内容

明治十四年九月二十九日（木）の第六回から十月一日（土）の第七回、さらに十月四日（火）の第八回で一段落する講義では、主和音、下屬和音、そして屬和音を、四声体でいかに自然に連結したらよいか……という文字通り和声学の初歩が教授される予定であったようだ。しかしその計画は学生達の四声体に関する理解不足のため大幅に後退し、結局、四声体になった場合の基本型と転

回型の相違を講義するだけで終わってしまった。

専のノートに書かれた英文をそのまま引用するなら、メーソンは

Lowest note determines the inversions.

という根本的なことを理解させるために、三回分の講義をついやしたのである。

しかしこれはある面当然な結果であった。なぜなら、現代の学生ですら、この和声の基本的な性格……すなわち一番下の音が和声構造を決定する……ことを、学びはじめの段階ではなかなか理解しないのである。

専が譜例1の(a)のように記載したのを、(b)のように訂正理解させるために、メーソンが少々余分な時間を消費したからといって、それは彼の教授法に原因するとは言えないであらう。

教授法として問題にすべきは、むしろこれ以降の進め方にある。つまり三回にわたる講義によって、四声体の基本的あり方を理解させたからには、当然、ごく初歩的な主要三和音の連結を実習させるべきなのだが、メーソンがそのための課題を学生にあたえた形跡はない。△連結▽に関して不徹底なまま、別の内容へと講義を進めてしまったので

ある。

第九回の講義内容

十月八日(土)の講義は、二声の流れが形成する基本的な進行形態、すなわち平行、反行、斜行について解説するのが目的であった。教授された内容は音楽上きわめて大切な概念であり、特にそのこと自体問題とすべき点はないが、この九回目でそれを講義する必要があったかどうかは疑問である。

疑問の第一は、第六回から第八回の講義で、せっかく△四声の和声形態△に関する基本がおさえられたのに、ここで突然△二声の対位形態▽に話題を移してしまったこと。そして第二は、その突然の転換が以後発展的に第十回の講義に連動していないことである。次の第十回では△五声の和音形態▽である属九の和音が、これまた唐突に教示されるのである。

譜例 2



注(3)

第九回の講義がなぜカリキュラム上不適切な位置にあるかは、これで御理解いただけたと思う。しかしそれはそれとして、教授された内容をごく簡単に紹介しよう。第九回のために使用されたノートのページは二頁、その最初のページには七曲の譜例……三度の平行進行一曲、六度の平行進行一曲、三度・六度・五度が混合した平行進行二曲、反行一曲、斜行二曲が記譜されている。そして次のページに、各々の進行型に関するメーソンの解説がノートされている。

解説の中で、三度と六度が中心になり間に五度がくるような平行進行(中村専が書きとった二つの例を譜例2の(a)(b)として掲げる)が、音楽の流れ方としては自然であ

るというメーソンの指摘は正しい。

ただ譜例(a)に見られる禁則の平行五度については、どのように解釈したらよいのであろうか……？

第十回前半の講義内容

ここではハ調長音階上に構築された七個の九度の和音、および属九の基本型と四つの転回型が譜面で提示されたあと、次のようなごく短いコメントが付け加えられている。専の英文そのままを引用しよう。

Only the chord of fifth of ninth are generally used in music.

第十回後半と第十一回の講義内容

十月二十二日土曜日の後半と二十五日火曜日は、非和声音について講義されている。しかし内容的にはごく簡単な概説で、各種非和声音それぞれの特性については説明されていない。

第十回後半の講義から検討してみることしよう。

ここではまず、メロディーを構成する音の中には和音に属さない音があり、そのような音のことを〈passing note〉と呼ぶと説明され、さらに、この〈passing note〉は弱拍にあらわれているのが普通で、強拍にあらわれるのは例外的なものであると講義されている。

メーソンのこの部分の説明は大筋において問題はない。しかし〈Passing note〉という用語の使い方は不用意であったと思う。〈passing note〉とは非和声音の一種に経過音であり、非和声音の代表的な形態ではあっても、それがそのまま非和声音を総称するものではないからである。〈passing note〉の部分はやはり〈nonharmonic notes〉と講義すべきであつたらう。



専のノートでは※印の部分のスラーがない。

譜例 3

そしてこの点に関するメーソンのあいまいさは、彼が掲げた譜例の中にも現われてしまっている。そこには経過音の他、なんの説明もなしに刺繍音が例示されているのである。

次、第十一回の講義は、内容的に大きく二つの部分に分けられる。

前半は、前回の講義の最後でふれられた非和声音の例外的なあり方……すなわち強拍に現われる非和声音が講義されている。この部分の講義は簡潔にして要をえたもので、譜例も、使われた *Appogiatura* *Leaning note* という用語も適切なものである。

その先、後半の講義はきわめて興味深い。音楽教育家メーソンの優れた教授法を目の当りにするようである。

彼はまず譜例3として掲げた三段八小節の旋律を黒板に書きつけ、ついで非和声音を活用しない旋律、すなわち最上段の動きが、和声的に満足であってもいかにぎこちないか……ノートの言葉を用いるなら *not much taste* であるかを解説し、さらに、非和声音を使って変化した二段目の動きが、旋律として *it will be very best* だと指摘しているのである。

最上段と二段目を比較することにより、学生達は容易に非和声音の本質的意義を理解したことであろう。しかもさらに、これに加えてメーソンは、この単純な譜面を利用し、極めて重要な事柄を教えるのである。

二段目の一、四、五、七小節目に注目させ、次に、スラーのかかった二つの四分音符が、二分音符一個のベースと対応していることを説明、このような音と音の関係を「対位法」 \vee と言うのだと解説したのである。

譜例3の音符を黒板に書いたあと対位法の説明まで、メーソンの講義は無駄なく流れていった。そしておそらく（……専のノートに書かれてある事ではなく、一つの想像ではあるが……）対位法の説明が終ったのち、メーソンは二段目の旋律を学生に歌わせたのではないかと思う。二段目だけではなく、もしかしたら下段を男子学生に、二段目を専に歌わせ、ごく初歩的な対位法の響きを学生達に実感させた……と想像してもこの場合は許されそうな気がする。

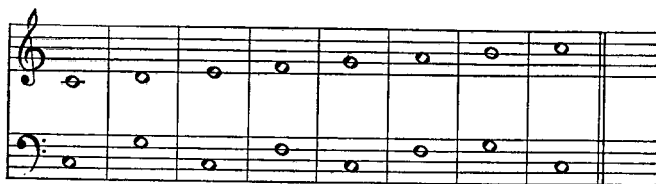
なぜなら二段目に現われてきた有名な旋律を、 \wedge 教育家 \vee メーソンが歌わせないということは、音楽の授業のあり方からみて不自然だからである。しかも次の第十二回の講義が、男女の声域に関するものであり、その予備のためにも、譜例3の二段目と三段目は、この第十一回講義の最後に、楽しい合唱教材として活用されたように思えてならない。

第十二回～第十四回までの講義内容

第十二回の授業では男女の声域と記譜との関連が講義された。その内容は一言でいってとても微笑ましい。その微笑ましいさを理解していただくため、この日（十月二十七日（木））メーソンが提示した最後の譜例とコメントを、そっくりそのまま専のノートから引用することにしよう。譜例4と英文をお読みいただきたい。

In this case, if lower note for gentlemen and upper note for ladies it will be just what have said before Tenth Interval.

If this been the upper note for gentlemen and lower for ladies, it will be Six Intervals.



譜例 5

えてくる時、それは素晴らしい喜びである。

以上四つのコメントのうち最後の響きに関する部分からは、我が国の建築構造上極めて貧しい響きにしか接することの出来ない日本の若者に、天井の高い石造建築が生み出す官能的なまでに豊饒な響きを、なんとか伝えようとするメーソンの肉声が聞えてくるようである。

第十四回、十一月一日火曜日の授業にうつろう。

この回の講義の主な目的は、ヨーロッパ音楽の根幹をなす響きのユニット……カデンツを教えることにあった。前半メーソンはNo1としてI—V—II—V—IIの終止型を二つ、No2としてI—V—II—V—IIを一つとI—V—II—V—IIを二つ、四分音符四個と附点二分音符一個のごく常識的なリズムで黒板に例示している。ソプラノ・アルト・バスの三声で書かれたその動きはすべて正しい。

この譜例に関する説明は、Iの和音とII・Vの副三和音にポイントがおかれている。これはごく当然なことで、あらためて論ずるまでもない。

問題は後半で提示されたNo3の例題である。まずその例題を、専のノートそのままに譜例6として掲げよう。彼女のノートの中で、和声学の課題らしい課題は唯一これだけである。

次にこの譜例に関する説明の部分を、ノートから英文のまま引用しよう。

The next exercise (No 3) is very old Grecian tune.

The very often minor comes in and the f is sharpened on reason of minor



譜例 6

third. into major third.

さて、もし譜例6と右の英文からのみ判断することを許されるなら、メーソンは教会旋法と古代ギリシャ旋法の相違をよく理解していなかったようである。譜例6の旋律はヨーロッパ中世、またルネッサンス旋法音楽の雰囲気をもってはいいても、決して古代ギリシャ的ではないからである。ヨーロッパ音楽が古代ギリシャと関連すると考えるのは、思想的な一つのがれであり、かならずしも音の裏付けによるものではない。

ところでその音……譜例6にもいささか問題がある。ただそれがメーソンの責任なのか、中村専の写し間違いなのか、現在では判断するすべもないので、ここではごく簡単に？マーク付きで疑問点を上げるにとどめておこう。

疑問一。この課題は上段十三小節で終るのだろうか……？ 矢印をした複縦線に注目していただきたい。

疑問二。下段まで続き全体十八小節とするなら、下段最初の小節の低音は、△ド▽でなくて△ソ▽ではないだろうか……？ なぜなら、上段から下段に向って、当然ト長調への転調が想起されるからである。

第十五回の講義内容

前回から約十日後、十一月十二日土曜日に行なわれた第十五回の授業



譜例 7

第十六回〜第十九回までの講義内容

十一月十五日（火）から二十六日（土）にかけての四回の講義については、前号六十九頁で行なった指摘「……第十五回と第十六回の間で、講義が一段落している点に注目されたい。本来ならば、第十六回から簡単な和声法の実習に進み、数多くのバス課題、ソプラノ課題を学生にあたえ、彼等の基礎的な作曲テクニックを向上させるよう指導すべきところを、メーソンは音程をより詳しく解説する方向に講義内容を転換させてしまったのである。……」という指摘をもう一度繰り返したい。

十六回から十九回にかけて教授されたことが無意味であったとは言わない。がしかし、こと△和声学▽という観点から検討するかぎり、その講義内容はどうしても△ととりとめない▽と判断せざるをえないのである。したがってここでは、四回の授業で講義された中の特徴的なことごらのみを、簡単に列挙するにとどめたい。

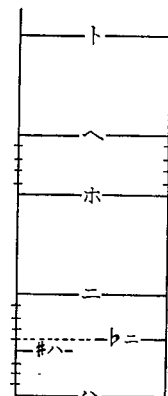
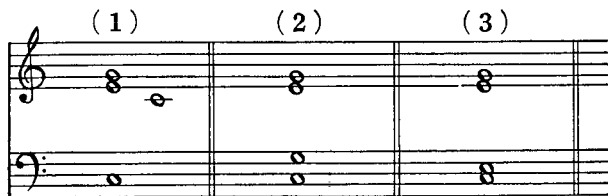


図 1

は、短調に関する講義であった。

内容はイ短調の和声的短音階と、その音階上に構築される三和音についてである。第一回と同じような梯子図が用いられて講義が進められたが、その展開について特に論ずることはない。

ただ一つ興味深いのは、この日はじめて、ハ・ニ・ホ・ヘ・ト・イ・ロという日本語の音名が、専のノートに書かれていることである。



譜例 8

その一。第十六回後半、メーソンのCisとDesが異名同音ではあっても、かならずしも同じ音高ではないと教えたあと、全音が九つに微分割され、CとCisの間は4コンマ、CisとDは5コンマ、またDとDesは4コンマ……すなわち譜例7と図1の関係にあることを講義している。

その二。第十七回の後半で譜例8を掲げ、三和音を四声体にした場合の重複音について講義されている。根音と第五音の重複が良く、三音が重複された(3)は〈unatural〉であるという指摘は正しい。

その三。第十八回では完全音程と不完全音程が復習され、長六度を転回すると短三度とか、増四度の転回が減五度とか、音程が転回された場合の関係がくわしく説明されている。

その四。第十九回の後半、短調の導音が半音上げられることに関連させて、メーソンは次のような感想を述べている。専のノートを引用しよう。

Class of the highest musicians in Germany dont recognize anything but the # 7 minor scale.

This is necessary in harmony but Italian and French think this attraction is unmelodie

学生達がこのコメントをただちに理解したかどうかは疑問だが、メーソンのドイツ音楽とラテン系音楽に対する比較は、本質をついていると思う。

第二十回の講義内容

三つの概念が講義されている。移調、転調、そして一時的転調である。専のノートは移調に三分の二頁、転調に二頁、一時的転調に三分の一頁ほど使われているが、内容の軽重からみて当然の配分である。メーソンの講義もおそらく同じ割合で進められたことであろう。

移調のところでは、教育的必要性から移調奏のもつ実践的価値が強調されている。

転調の部分では、基本的な五度関係にある隣接調への転調が説明されている。その講義内容や掲げられた譜例はごく常識的なもので、特に問題とすべき点はない。ただ次の一節、アンダーラインをした箇所は、専の写し間違いか、メーソンの思い違いであろう。ここは $g\ 1\ \sharp$ になるのが正しい。

If original tune in d it will modulate to a 3 \sharp or d 2 \sharp these are its neighbors.

最後、一時的転調については、その \wedge suddenly \vee な性質が簡潔に指摘されているだけである。

第二十一回の講義内容

明治十四年十二月一日木曜日最後の授業は、前回までに講義された内容、そのごく基本的なことが譜面となって整理されている。

最初のページには長音階の梯子図が掲げられ、次のページでハ長調から嬰ハ長調まで、シャープ系八種の音階が記譜されている。

第三ページでは梯子図と共に、長音階の音一つ一つが英語で教示されている。その次の四ページは、ハ調長音階上の三和音七個と、その二種の転回型それぞれ七個、合計二十一個の和音が整理されている。この図は第五回と第六回、そして第十三回とこの最終回、都合四回例示されているので、専をはじめ学生達にはなじみ深い表であろう。

続く第五ページはハ調長音階上の七の和音が七個、そして最終ページには再度書かれたその基本型と三種の転回型、合計二十八個の七の和音が整理されている。これ等について特に解説されてはいない。そして専のノーとはここで終る。

ノートを概観し終ったところで、第七号八頁で述べたことを繰り返しておきたい。すなわち、メーソンによる音楽取調掛最初の和声学講義は「……文字通り音程や和音、和声進行についての講義であり、現在の我々が受けるような和声法の実習的教育ではないこと……」またそれは「楽典、あるいは音楽通論の講義として位置づけられる程度……」だったのである。

しかもその講義プログラムの立て方や、講義内容に疑問がないわけではない。余計な知識と思われる部分はカットして、せめて全体の五分の一……四時間ぐらいいは和声法の実習を体験させるべきではなかったか……とも考える。しかしこのような過去に対する感想ほど無意味なものはない。あるがままを正しく見るべきであらう。

とすれば、メーソンの講義はやはり極めて貴重なものであったと評価しなければならない。なぜなら、近世ヨーロッパ音楽の合理的な音体系＝調性、それを理解する最初の鍵を、彼はこの時はじめて我々にあたえてくれたのだから。

以上で中村専のノートに関する考察は一応終るが、最後に、この小論を書く過程で気づいたことをメモしておきたい。

それはメーソンの生年月日が、一般に知られているよりも十年早いと言うことである。日本の文献はもとより、アメリカの音楽辞典まで、メーソンは一八二八年に誕生したことになっている。しかし、この小論の「その二」を書くにあたって参考にした論文の著者 L・M・マクガレル氏の研究により、メーソンは一八一八年四月三日、メイン州の

ターナーで生まれたことが明らかになった。(5)

マクガレル氏は、メーソンのアメリカにおける業績、職歴に必要なとした年数から逆算し、誕生年月日に約十年の誤差がありそうだと推理、ターナーで出生証明書を確めて、右に求べた事実を発見されたのである。この新事実をふまえた上で正確に記述された日本最初の文献は、平凡社の音楽大辞典メーソンの項で、その筆者は拙論「その一」で紹介した東京芸術大学音楽研究センターの森節子氏である。

なお、定評ある遠藤宏著「明治音楽史考」の七十五ページにある「……警視本署への通達にはメーソンの年齢五十才⁽⁶⁾と明記してある他……」という部分を確認するため、警察関係に資料の有無を問い合わせたが、現在までのところにも発見されていない。

メーソンがはじめて機能 and 声の初歩を講義した時から約百年、現在の日本は多種多様な音楽が鳴り響き、音楽に関する情報量も膨大なものとなった。しかし、静かな環境の中で、メーソンの講義を一生懸命ノートした中村専の心……謙虚に学ぶ心、それを我々は近頃やや忘れているのではないだろうか。こと音楽文化に関するかぎり、反省の必要な時代に入ったようである。

七号から九号まで、三回にもわたって貴重な誌面を提供して下さった学習院大学哲学会誌関係の方々々に心から感謝し、中村専の和声学ノートに関するささやかな考察をこれで終りたいと思う。

注

- (1) 『哲学会誌』第七号 p. 1~p. 14.
- (2) 『哲学会誌』第八号 p. 67~p. 86.
- (3) 第一小節二拍目のアルトにはソとファ両方の音が書かれている。
- (4) 日本語の倚音のことである。
- (5) したがって第七号第一頁のメーソンの生年月日は(一八一八~九六年)と訂正したい。
- (6) 明治十三年(一八八〇年)に五十三才ということは、一八二七年生まれということになる。

主要参考文献

- ・ 遠藤宏『明治音楽史考』有明堂 昭23
- ・ 東京芸製大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡——音楽取調掛資料研究』音楽之友社 昭51
- ・ 藤原義久『和声学事始——メーソンの和声学教育に関する新資料紹介——』哲学会誌第七号 昭56 第八号 昭58 学習院大学哲学会